

いえやす 家康

しゅっせ 出世すごろく

イン
i n

い わ た
I W A T A

い わ た し つ た とくがわいえやす でんせつ
磐田市に伝わる徳川家康の伝説

いわたしりつとしょかん
磐田市立図書館

れいわ ねんどさくせい
令和4年度作成

え ど ぼくふ しよだいしようぐん とくがわいえやす みかわのくに おかざき げんざい
江戸幕府の初代将軍となった徳川家康（1542-1616）は、三河国岡崎（現在の

あいちけん おかざき し う いえやす みかわのくに げんざい あいちけんとうぶ とおとうみのくに
愛知県岡崎市）で生まれました。家康は、三河国（現在の愛知県東部）や遠江国

げんざい しずおかけんせいぶ りょうち まも さいだい げんざい いわたし
（現在の静岡県西部）の領地を守るため、20歳代のころから、現在の磐田市や

はままつし まわ たけだんげん たたか げんき ねん げんざい
浜松市の周りで、武田信玄との戦いをくりひろげました。元龜3（1572）年、現在

いわたしひとこと たたか ひとことざか たたか とくがわしてんのう ひとり ほん
の磐田市一言で戦われた「一言坂の戦い」では、徳川四天王の1人である本

だへいはちろうただかつ だいかつやく
多平八郎忠勝が大活躍をしました。

いえやす いわたし なんぶ おおいけ なかいずみごてん た おおいけ たか
家康は、磐田市の南部にある大池のほとりに「中泉御殿」を建てて、大池で鷹

が たの なかいずみごてん え どじだい はじ
狩りを楽しみました。中泉御殿は江戸時代の初めになくなってしまいましたが、

なかいずみ げんざい ごてん ちめい のこ じつげん
中泉には現在でも「御殿」という地名が残っています。また、実現はしませんでした。

げんざい しろやまきゅうじょう き の さきじょう しろ
したが、現在の城山球場のところに「城之崎城」というお城をつくらうとしま

した。

とくがわいえやす ふか いわたし たけだ たたか ちいき
このように徳川家康と深いつながりがある磐田市には、武田との戦いや、地域

ひと のふれあいにつたわ いえやす のこ
の人とのふれあいにまつわる家康のおはなしが、たくさん残されています。この

いわたし つた いえやすでんせつ あそ
すごろくは、磐田市に伝わる家康伝説をもとにしてつくりました。すごろくで遊

あと せつめい よ
んだ後には、それぞれのおはなしの説明を読んでください。

わたし す いわた ねん まえ かつやく いえやす
私たちが住んでいるこの磐田で、400年ほど前に活躍していた家康のことが、

みぢか かん
とても身近に感じられますよ。

1、お清水

いえやす さい みつけ まも やへいじ なまえ やしき
家康、26歳 見付を守った弥平次に名前と屋敷をあたえる

やしき みず で
「屋敷には おいしいわき水が 出るんだよ」

えいろく ねん いえやす じん かま あんまむら げんざい はまつしひがしくあんまちょう
永禄11 (1568) 年、家康が陣を構えていた安間村 (現在の浜松市東区安間町)

だいかん あんま やへいじ いえやす みつけ げんざい いわたしみつけ らんぼう
で代官をしていた安間弥平次は、家康から、見付 (現在の磐田市見付) で乱暴を
はたらいていた武田方の秋山伯耆守信友を追いはらうようと命令を受けまし
た。

やへいじ みつけ ほうきのかみ お だ いえやす
弥平次は見付から伯耆守を追い出すことができたので、ほうびとして家康から
へいじ や なまえ みつけ す めい へいじ や
平次弥という名前をもらい、見付に住むことを命じられました。そこで平次弥は、
きれいなみず やしき た へいじ や やしき げんざい みつけ
きれいな水がわきでるところに屋敷を建てました。平次弥の屋敷は現在の見付の
しみずちょう ごいえやす かけがわじょう いまがわうじざね せ
清水町にあったそうです。その後家康は、掛川城の今川氏真を攻めるときに、こ
やしき と かえ はまつじょう かえ まえ へいじ や やしき と
の屋敷に泊まりました。またその帰りも浜松城へ帰る前に平次弥の屋敷に泊ま
って、としこ
って、年越しをしたということです。

やしき にわ わ で しみず か へいじ や やしき おとず
屋敷の庭に湧き出した清水はずっと枯れることなく、平次弥は、屋敷を訪れた
いえやす みず しみず
家康にこの水をすすめたので「お清水」といわれるようになりました。

●この本を読んで詳しくなろう

いわた いわたしかんこうきょうかい ねん
『磐田むかしばなし』(磐田市観光協会 1981年)

いわた いわたしだんかい へん いわたやじまやしよてん ねん
『磐田ものがたり』(磐田史談会/編 磐田谷島屋書店 1988年)

いわたしし じょうかん いわたし ねん
『磐田市誌 上巻』(磐田市 1954年)

いわたしし つうしへん ちゅうかん いわたし ねん
『磐田市史 通史編 中巻』(磐田市 1991年)

2、城之崎城

いえやす さい みつけ ちか きのさき しろ
家康、26歳 見付の近く城之崎に城をつくりはじめる

みつけ まち いちぼう とおとうみ きよてん きのさきじょう
「見付の町を一望だ！ 遠江の拠点にするぞ 城之崎城」

えいろく ねん みかわ げんざい あいちけんとうぶ とおとうみ げんざい しずおかけん
永禄11 (1568) 年に三河 (現在の愛知県東部) から遠江 (現在の静岡県

せいぶ せ こ いえやす ひくま げんざい はまつ はい とおと
西部) に攻め込んだ家康は、引馬 (現在の浜松) に入りました。ところが、遠
うみぜんいき おさ ほんきよち
江全域を治めるための本拠地がありません。

そこで、いえやす ならじだい こくふ さか けいざいてき ゆた みつけ しろ
そこで、家康は奈良時代から国府として栄え、経済的にも豊かな見付に城を
つくろうと考えました。翌年の秋から、みつけ まち みわた やま うえ き のさき
見付の町を見渡せる山の上に城之崎
じょう げんざい しろやまきゅうじょう ぼしょ しろ
城をつくりはじめました。ここは現在の城山球場の場所にあたります。城の
みなみがわ にしがわ いまのうら ひろ ちけいてき よ
南側と西側には今之浦が広がり、地形的にはとても良いところでした。しか
お だ のぶなが き のさきじょう ちくじょう ほんたい いえやす のぶなが いけん う い
し、織田信長は城之崎城の築城に反対したため、家康は信長の意見を受け入
げんきがん ねん はる き のさきじょう こうじ ちゅうし
れて、元亀元 (1570) 年の春に城之崎城の工事を中止しました。そして、
ひくまじょう はまつじょう なまえ か ほんきよち きじょう おかざきじょう あいちけんおかざきし
引馬城を浜松城と名前を変えて本拠地とし、居城を岡崎城 (愛知県岡崎市)
から はまつじょう うつ
から浜松城に移しました。

●この本を読んで詳しくなろう

いわたしし つうしへん じょうかん いわたし ねん
『磐田市史 通史編 上巻』(磐田市 1993年)

ずせつ いわたしし いわたし ねん
『図説 磐田市史』(磐田市 1995年)

アイ ちいきみりよくほっけん いわたしんようきんこ ねん
『iズーム 11 いわしん地域魅力発見マガジン』(磐田信用金庫 2016年)

3、冷酒清兵衛

いえやす さい たたか さいちゆう せいべえ ひやざけ
家康、30歳ごろ 戦いの最中に、清兵衛から冷酒をもらう

せいべえ ひやざけ あつ いえやすぐん
「清兵衛に冷酒もらい 熱くたたかう家康軍」

みつげしゆく げんざい いわたしみつけ さかや うえむらせいべえ さむ ふゆ ひ
見付宿（現在の磐田市見付）で酒屋をしていた上村清兵衛は、寒い冬の日に、
たけだ たたか とちゆう あたさ させ の みせ き いえやす からだ あたさ
武田との戦いの途中で温かい酒を飲もうと店に来た家康に、体が温まるから
ぎやく つめ さげ ひ たたか か いえやす ご せいべえ
と逆に冷たい酒をすすめました。その日の戦いに勝った家康は、その後、清兵衛
おく もの はなし え どじだい とおとうみこせきす え ほん
に贈り物をしたそうです。この話は、江戸時代の『遠江古跡図会』という本に
か
書かれています。

ひやざけ だいす せいべえ ご いえやす たず いっしょ ひやざけ の
冷酒が大好きな清兵衛は、その後も家康が訪ねてくるたびに、一緒に冷酒を飲
んだそうです。家康が清兵衛に贈ったといわれる刀「太刀 銘成高」は、現在、
しずおかけん していぶんかざい
静岡県の指定文化財となっています。

●この本を読んで詳しくなろう

いえやす ゆかい でんせつ わ みたらい きよし ちょ えんしゅうでんせつけんきゅうきょうかい ねん
『家康の愉快的伝説101話』（御手洗 清／著 遠州伝説研究協会 1983年）

いわた いわたしかんこうきょうかい ねん
『磐田むかしばなし』（磐田市観光協会 1981年）

いわた ぶんかざい いわたしきょういくいいんかいぶんかざいか ねん
『磐田の文化財』（磐田市教育委員会文化財課 2009年）

いわたしし じょうかん いわたし ねん
『磐田市誌 上巻』（磐田市 1954年）

「いわた文化財だより 第109号」※磐田市ホームページにあります

4、しのぎ村

いえやす さい いくさ ま いわたばら むら に かく
家康、30歳ごろ 戦に負けて 磐田原の村に逃げ隠れる

ふじ き した かく がまん に
「藤の木の下に隠れていたけれど 我慢できずに 逃げだした」

いくさ ま いえやす いわたばら ちゅうおう むら に
戦に負けた家康は、磐田原の中央にあった村に逃げてきました。そして、村
なか おお ふじ き した かく てき ついげき ぼげ
の中の大きな藤の木の下に隠れました。しかし、敵の追撃が激しくどうにもなら
なくなり、「ここには、だめだ」とあきらめ、てきへい しゅうう ごと たいぐん われ
如何にても しのぎなからん」と歌をよみました。耐えるという意味の「凌ぎ」と
いかな
いう言葉のところに特に大声で言ってから、どこかへ逃げていきました。

それ以来、この村のことを「滋野木村」と呼ぶようになったと伝えられていま
す。その後、家康が隠れた藤の棚がとても広がったので、この村の名前を
しのぎむら おおふじむら か
「滋野木村」から「大藤村」に変えたといわれています。

●この本を読んで詳しくなろう

いえやす ゆかい でんせつ わ みたらい きよし ちょ えんしゅうでんせつけんきゅうきょうかい ねん
『家康の愉快的伝説101話』（御手洗 清／著 遠州伝説研究協会 1983年）

いわたむかし いわたむかし ほぞんかい ねん
『磐田昔がたり』（磐田昔がたり保存会 1998年）

5、笠の紋

いえやす さい しろう ざ えもん いえ ひやくしやうすがた へんそ
家康、30歳ごろ 四郎左衛門の家でお百姓 姿に変装する

みの かさ ひやくしやう へんそ
「蓑と笠で お百姓に変装だ」

げんきねんかん ねん ころ いえやす か おおいけ げんざい いわたし
元亀年間(1570-1572年)の頃、家康は、ときどき狩りをする大池(現在の磐田市

なんぶ いけ しやうへん さみだれ ふ てき たけだ へい お
南部にある池)の周辺で、五月雨の降るなか敵の武田の兵に追われてしまい、
なかのむら げんざい いわたしなかの ひやくしやうしろう ざ えもん いえ けらい ふたり
中野村(現在の磐田市中野)の百姓 四郎左衛門の家に、家来とたった2人で
逃げ込みました。

しろう ざ えもん とても おどろ たう じき いえやす
四郎左衛門はとても驚きましたが、ちょうど田植えの時期だったので、家康

の ら ぎ みのかさ か いえやす ひやくしやうすがた へんそ お
に野良着と蓑笠を貸してやり、家康を百姓 姿に変装させました。追ってきた
たけだ へい みのかさすがた いえやす き いえやす てんか と
武田の兵は、蓑笠 姿の家康には気づきませんでした。そこで家康は、「天下を取
ることができたら、四郎左衛門に土地をやる」という証文を書き残して、西の
ほう ぎ い
方へ去って行きました。

ごいえやす とち い しろう ざ えもん みの せい みやうじ かさ
その後家康は、土地はいらなと言った四郎左衛門に、「蓑」の姓(名字)と笠

かたち かもん あた なかのむら ひとびと ぶやく しばいしや か ろうどう
の形の家紋を与え、中野村の人々の夫役(支配者から課せられる労働のこと)を
めんじよ しゅいんつ しょうしょ あた
免除するという朱印付きの証書も与えたといわれています。

*「笠の紋」の後日談が「6、木野家につたわる家康の鎧・甲」です。

●この本を読んで詳しくなろう

ねんちゆうぎやうじ むかし ふくでちやうきやういくいいんかい ねん
『年中行事と昔ばなし』(福田町教育委員会 1986年)

いわたむかし いわたむかし ほぞんかい ねん
『磐田昔がたり』(磐田昔がたり保存会 1998年)

いわた いわたしかんこうきやうかい ねん
『磐田むかしばなし』(磐田市観光協会 1981年)

6、木野家につたわる家康の鎧・甲

いえやす さい む よろいかぶと きのけ まつ ねもと う てき かく
家康、30歳ごろ 脱いだ鎧兜を、木野家の松の根元に埋めて隠す

てき み いちだいじ う かく よろいかぶと
「敵に見つかれば一大事。埋めて隠せよ鎧兜」

げんきがん ねん いえやす なかのむら げんざい いわたしなかの しろう ざ
元亀元(1570)年、家康をかくまった中野村(現在の磐田市中野)の四郎左

えもん こま いえやす む よろいかぶと たけだ がた み つかえたら じぶん
衛門は困っていました。家康たちの脱いだ鎧兜が武田方に見つかったら、自分
たちが家康を助け、逃がしたことがわかってしまうからです。そうなったら、武田
の兵たちからひどい目にあわされてしまうだろうと恐れていたのです。

よる くら なるのを待って、四郎左衛門たちは、鎧兜の預け先を探して夜

みち ある いっしきむら げんざい いわたしいっしき つ しろう ざ えもん
道を歩きました。そして、一色村(現在の磐田市一色)に着いた四郎左衛門は、
むら いちばんたか やしき きのみごえもん たの やしき ほ おお
村でも一番高いところに屋敷のある木野孫右衛門に頼み、屋敷に生えている大き
な松の根元に鎧兜を埋めてもらうことにしました。そのころの一色村は、「六部
じゆんれい そう ねんみち まよ めいろ
(巡礼の僧)が3年道に迷う」といわれるほどの迷路のようなどころだったの

で、埋めた鎧兜が敵に見つかる心配はありませんでした。

●この本を読んで詳しくなろう

ねんちゆうぎやうじ むかし ふくでちやうきやういくいいんかい ねん
『年中行事と昔ばなし』(福田町教育委員会 1986年)

きやうどしたんぼう ばんなん ぶんかきやうかい ねん
『郷土史探訪』(磐南文化協会 2012年)

7、権現森ごんげんもり

いえやす さい しんげんぐん お しろわじんじゃ もり かく
家康、30歳ごろ 信玄軍に追われ白羽神社の森に隠れる

いえやす かく もり ごんげんもり
「家康が隠れた森 権現森」

げん きねんかん ねん ころ いえやす すうにん けらい つ しろわ げんざい いわたし
元龜年間(1570-1572年)の頃、家康が数人の家来を連れて白羽(現在の磐田市

しろわ ある てき たげだしんげん ぐん で あ
白羽)を歩いていました。すると、敵の武田信玄の軍にばったり出会いました。

いえやす に ちか しろわじんじゃ にし つづ
家康は「これはいけない!」と逃げだし、近くの白羽神社の西に続く、こんもり
とした森の中に隠れました。

しろわじんじゃ やまとたけるのみこと ながしろわのみこと ふる じんじゃ いえやす
この白羽神社は、倭建命と長白羽命をまつる古い神社です。家康はこの
じんじゃ ぶ じ に ねっしん いの いえやす たげだ
神社に「無事に逃げられますように」と熱心に祈りました。おかげで家康は、武田
ぐん み に
の軍に見つからずに逃げることができました。

いえやす のち とうしょうだいごんげん まつ ごんげんさま
家康は、後に「東照大権現」として祀られたので「権現様」といわれるように
いえやす かく もり ごんげんもり
なり、家康が隠れたこの森は「権現森」といわれるようになりました。

●この本を読んで詳しくなろう

きょうどどくほん りゅうよう りゅうようちょうきょういくいんかい ねん
『郷土読本 ふるさと竜洋』(竜洋町教育委員会 1977年)

いえやす ゆかい でんせつ わ みたらい きよし ちょ えんしゅうでんせつけんきゅうきょうかい ねん
『家康の愉快的伝説101話』(御手洗 清/著 遠州伝説研究協会 1983年)

8、梅の原うめ はら

いえやす さい ひとことざか つか へい うめ
家康、30歳 一言坂で疲れた兵をすっぱい梅ではげます

うめ み おも げんきだ
「梅の実を 思いうかべて 元気出せ」

げんき ねん ひとことざか たたか ひ あさ たたか
元龜3(1572)年の「一言坂の戦い」の日、朝からずっと戦って、すっかり

つか へい うえのはら げんざい いわたしこうのだい いわたけいさつしょ ちか
疲れてしまった兵たちは、上野原(現在の磐田市国府台:磐田警察署の近く)の
あたりにさしかかり、のどがかわいてしきりに水を飲みたいと言いました。

こま いえやす さか うえ い うめ はやし
そこで困った家康は、「坂の上まで行けば梅の林があるから、そこに行くまで
がんばれ」と、兵たちを励ましました。梅と聞いて、兵たちは、自分が梅の実を
た ようす おも う で げんき
食べる様子を思い浮かべ、つばが出てきたので、元気をとりもどしました。

そこで、その場所を「梅の原」というようになったそうです。明治の初めま
でこのあたりを「うえのはら(上野原)」、「うえのみしんでん(上野巳新田)」と
いいましたが、それぞれ「うめのはら(梅の原)」、「うめのみしんでん(梅の実
しんでん
新田)」ともよばれていたとのことです。

●この本を読んで詳しくなろう

きょうみづか かいじょうのおうじ いわたししたかまち ぶんか たず いわたし ねん
『京見塚と海上皇子 磐田市高町の文化を訪ねて』(磐田市 1999年)

いえやす ゆかい でんせつ わ みたらい きよし ちょ えんしゅうでんせつけんきゅうきょうかい ねん
『家康の愉快的伝説101話』(御手洗 清/著 遠州伝説研究協会 1983年)

いわた いわたしだんかい へん いわたやしまやしょてん ねん
『磐田ものがたり』(磐田史談会/編 磐田谷島屋書店 1988年)

9、一言坂の戦い

いえやす さい ひとつことざか しんげん たたか
家康、30歳 一言坂で信玄と戦う

「みごとなしんがり 頼れる男 本多平八郎忠勝」

ひとつことざか たたか げんき ねん がつ にち おこな たけだしんげん いえやす
「一言坂の戦い」は、元龜3 (1572) 年10月13日に行われた武田信玄と家康の戦いです。家康軍は、4千余りの兵力で一言山に陣をしきました。大将をまかさされた本多平八郎忠勝は、鹿の角のついた兜と黒糸威しの鎧をつけ、とんぼ切りという槍を持って戦に臨みました。対する信玄軍は、3万5千の大軍で見付に陣をしきました。結局、多勢に無勢で家康は負けてしまい、浜松城へ引き上げました。

しかし、しんがり（軍を引き上げる際、最後尾で追ってくる敵を防ぐこと）をまかさされた平八郎は、敵味方の間を自由自在に馬を乗り回し、敵兵を突き伏せなぎ倒し、めざましく戦いました。さらに、枯れ草を焼き、坂に薪を積み上げて火をつけ、その煙を利用して退却し、味方の兵は一兵も討たれずにすんだと伝えられています。

たけだ ぐんぜい いえやす す ふた から
武田の軍勢もこのことをほめたたえて、「家康に過ぎたるものが二つあり 唐の頭に本多平八」という歌をよみ、信玄の近くに仕えていた小松右近という人が、この歌を木端に書いて、一言坂に立てたと記録されています。

●この本を読んで詳しくなろう

『ふるさと豊田』（豊田町郷土を研究する会 1974年）

『ふるさと豊田 改訂版』（豊田町教育委員会 1977年）

『豊田町誌 通史編』（豊田町 1996年）

『一言坂の戦い 武田信玄、遠州侵攻す』（岡部 栄一／著 2021年）

10、挑灯野の戦い、万能蛭、ままね、一言観音

いえやす さい まんのう たけだぐん わな し か こうげき
家康、30歳 万能で武田軍に罾を仕掛け、攻撃する

「提灯を徳川軍だと思い込み、沼に飛び込む武田軍」

げんき ねん ひとつことざか たたか ま いえやす かみまんのう げんざい いわたし かみまんのう
元龜3 (1572) 年、一言坂の戦いで負けた家康は、上万能（現在の磐田市上万能）

の沼地に着きました。家康は、沼に布の橋をかけ、沼の先の畑に提灯（挑灯とも書く）と旗をたくさん並べて、陣地があるかのように見せました。騙された武田軍は沼地にはまり、徳川軍に攻撃されました。村人たちが死んだ兵を葬った場所を「挑灯野」と名づけたといわれています。その後、この付近には、死んだ兵の魂ではないかといわれる「万能蛭」とよばれる大きなホタルがたくさん飛ぶようになりました。しかし、最新の研究によると、挑灯野の戦いは一言坂の戦いと同時期ではなく、天正2 (1574) 年6月以降に、家康が武田勝頼と池田の戦いと同時期ではなく、天正2 (1574) 年6月以降に、家康が武田勝頼と池田（現在の磐田市池田）で戦ったときの出来事だといわれています。磐田市一言には、武田軍から逃げてきた家康が祈願したところ無事に浜松城に帰ることができたと伝わる、一生に一度一言だけ願いを叶えてくれる「一言観音」がある智恩斎という寺や、一言坂の戦いで、馬が泥沼に脚を取られ寝てしまったと伝わる橋「ままね（馬寝）橋」もあります。

●この本を読んで詳しくなろう

いえやす ゆかい でんせつ わ みたらい きよし ちょ えんしゅうでんせつけんきゅうきょうかい ねん
『家康の愉快的伝説101話』（御手洗 清／著 遠州伝説研究協会 1983年）

『豊田歴史の玉手箱』（豊田郷土を研究する会 2011年）

『ふるさと豊田 改訂版』（豊田町教育委員会 1977年）

『豊田町誌 別編2 民俗文化史』（豊田町 2001年）

『豊田町誌 通史編』（豊田町 1996年）

11、帯金の姓

いえやす さい かみほんごう かね か れい みょうじ あた
家康、30歳 上本郷でお金を借り、お礼に名字を与える

おび なか かね いえやす すく
「帯の中のお金、家康を救う！」

げんき ねん いえやす たけだぐん たたか ま お とき かみほんごう
元亀3 (1572) 年、家康は、武田軍との戦いに負けて追われていた時、上本郷

げんざい いわた しかみほんごう おお やしき ながやもん なか かく てき
(現在の磐田市上本郷) の大きな屋敷の長屋門の中に隠れました。敵がいなくな
った後、浜松に帰ろうとしましたが、天竜川を舟で渡るためのお金がありません。

こま いえやす やしき しゅじん かね も う あ しゅじん
困った家康は、屋敷の主人にお金を持っていないことを打ち明けると、主人は
おび あいだ い かね いえやす わた いえやす ぶ じ
帯の間に置いていたお金を、家康に渡してくれました。おかげで、家康は無事、
はままつ かえ
浜松に帰ることができました。

ご てんか いえやす おび かね と だ じぶん たす
その後、天下をとった家康は、帯からお金を取り出して自分を助けてくれたお
れい しゅじん おびかね せい みょうじ あた とき いえやす
礼として、この主人に「帯金」の姓(名字)を与えたそうです。この時、家康は、
のぞ たはた あた い よく しゅじん じぶん
望むなら田畑も与えようと言いましたが、欲がなかった主人は、自分にはふさわ
しくないからと断ったといわれています。

●この本を読んで詳しくなろう

いえやす ゆかい でんせつ わ みたらい きよし ちよ えんしゅうでんせつけんきゅうきょうかい ねん
『家康の愉快的伝説101話』(御手洗 清/著 遠州伝説研究協会 1983年)

とよだれきし たまてぼこ とよだきょうど けんきゅう かい ねん
『豊田歴史の玉手箱』(豊田郷土を研究する会 2011年)

とよだ かいていばん とよだちょうきょういくいんかい ねん
『ふるさと豊田 改訂版』(豊田町教育委員会 1977年)

12、池田の渡船

いえやす さい ぜんえもん いけだ ふね の
家康、30歳 善右衛門に、池田から舟に乗せてもらう

ぜんえもん いえやすの わた てんりゅうがわ
「善右衛門、家康乗せて、こっそり渡る天竜川」

げんき ねん ひとことざか たたか ま いえやす すうにん けらい
元亀3 (1572) 年、一言坂の戦いで負けた家康は、数人の家来とともに、やっ

いけだ げんざい いわたしいけだ に てんりゅうがわ わた せんだう
と池田(現在の磐田市池田)まで逃げてきましたが、天竜川を渡してくれる船頭
がいけません。家康は竹やぶに隠れていた船頭の善右衛門を見つけ、対岸まで渡し
てくれるように頼みました。善右衛門は船頭衆を10人ほど集め、夜になってか
いえやす ぶ じ たいがん はんば げんざい はままつしひがしくざいもくちょう おく
ら、家康を無事に対岸の半場(現在の浜松市東区材木町)まで送りました。そこ
いえやす ぜんえもん はんば せい みょうじ あた ぜんえもん いけだ
で家康は、善右衛門に「半場」の姓(名字)を与えました。善右衛門は、池田に
もど たけだぐん いえやす あと お ふね ぎょうこうじ にし いけ しず
戻ると、武田軍が家康の後を追わないようにと、舟を行興寺の西の池に沈めて
しまったので、この池は「舟かくしの池」といわれるようになりました。舟を漕
ろ いま てんぱくじんじやけいだい ぼしよ いけ かく いけ ろ
ぐ櫓は今の天白神社境内の場所にあった池に隠したので、この池は「櫓かくしの
いけ
池」といわれるようになりました。

いえやす とき れい いけだ せんだう てんりゅうがわ とせん けんり あた
家康は、この時のお礼として、池田の船頭たちに天竜川の渡船の権利を与えた
といわれています。池田には家康が出たとされる渡船の権利を認める「徳川
いえやすはんもつうし のこ し していぶんかざい
家康判物写」が残されており、市の指定文化財となっています。

●この本を読んで詳しくなろう

とよだれきし たまてぼこ とよだきょうど けんきゅう かい ねん
『豊田歴史の玉手箱』(豊田郷土を研究する会 2011年)

いわた ぶんかざい いわたしきょういくいんかいぶんかざいか ねん
『磐田の文化財』(磐田市教育委員会文化財課 2009年)

とよだちょうし べつへん みんぞくぶんかし とよだちょう ねん
『豊田町誌 別編2 民俗文化史』(豊田町 2001年)

13、五十子の一本松

いえやす さい いし もと やまい ぜんかい でんせつ いっほんまつ
家康、30歳ごろ 石を戻したら病が全快した伝説の一本松

いえ まも ふ し ぎ いっほんまつ
「家やすらかに、守れ不思議な一本松」

い か ご ら げんざい いわたしいかご すいでん なか いっほんまつ ちい つか
五十子村（現在の磐田市五十子）の水田の中に、一本松とよばれる小さな塚が
あります。ここは、いえやす とおとうみのくに げんざい しずおかけんせいぶ おさ いくさ
命を落とした兵を葬った場所とも伝わっています。

むかし むらびと まつ ねもと いし いえ も かえ だいこん つ
昔、ある村人が、その松の根元にあった石を家に持って帰り、大根を漬ける
ためのおもしとして使っていました。しかし、この村人は、あるとき、げんいん わ
からないびょうきになってしまいました。いろいろな医者に診察してもらったのです
が、ぜんぜん なお いの
あ、全然、治りません。そして、あちらこちらでお祈りをしてもらったところ、
まつ ねもと いし うご わざわ
あの松の根元の石を動かしたための災いだといわれたのです。

むらびと いし もと もと いま くる びょうき うそ
そこで、村人が石を元のところに戻すと、今まで苦しんでいた病気が嘘のよう
に治ってしまったとのことでした。

●この本を読んで詳しくなろう

ねんちゅうぎょうじ むかし ふくでちやうきやういくいんかい ねん
『年中行事と昔ばなし』（福田町教育委員会 1986年）

ちゅうえんむかし ちゅうえんちくこういきしちやうそんけん じ むくみあい ねん
『中遠昔ばなし』（中遠地区広域市町村圏事務組合 2003年）

ふくでちやう しせき ふくでちやうきやういくいんかい ねん
『福田町の史跡』（福田町教育委員会 2005年）

14、権現様隠れ岩

いえやす さい たけだぐん に しきじ いわあな かく
家康、30歳 武田軍から逃げ、敷地の岩穴に隠れる

てき さ ま いわあな あんぜん
「敵が去るまで、じっと待とう。この岩穴にいれば安全だ」

げんき ねん みかたがはら たたか まえ たけだしんげん たいぐん あきはじ とお
元龜3（1572）年、三方ヶ原の戦いの前、武田信玄の大軍が、秋葉路を通って
しなののくに みなみ む せ たけだぐん いぬいじやう はままつしてりゆうく
信濃国から南に向かって攻めてきました。武田軍は犬居城（浜松市天竜区
はるのちやう いだいじやう しゅうちぐんもりまちいだい せ お つぎ ふたまたじやう はままつしてりゆうく
春野町）や飯田城（周智郡森町飯田）を攻め落とし、次は二俣城（浜松市天竜区
ふたまたちやう せ せま
二俣町）を攻めるために迫ってきました。

いえやす く と はままつじやう げんざい しし はなこうえん あた
家康は、これを食べ止めようと浜松城から、現在の獅子ヶ鼻公園の辺り
（磐田市敷地）までやって来ました。しかし、たけだぐん み たたか
武田軍に見つけられ、戦いました
が敗れてしまいました。逃げた家康は、近くにある岩穴にたどり着きました。岩
あな すうにん はい ひろ いえやす すうにん けらい いわあな かく ふたた
穴は数人が入れるほどの広さでした。家康は数人の家来とこの岩穴に隠れて、再
たけだぐん み たす
び武田軍に見つかることなく助かった、といわれています。

●この本を読んで詳しくなろう

いえやす ゆかい でんせつ わ みたらい きよし ちょ えんしゅうでんせつけんきゆうきやうかい ねん
『家康の愉快的伝説101話』（御手洗 清／著 遠州伝説研究協会 1983年）

とよおかものがたり ぞうかんごう いわざき みちお へん いわざきみちお ねん
『豊岡物語 増刊号』（岩崎 道夫／編 岩崎道夫 1988年）

15、権現様と勝越（権現松）

いえやす さい かし つか まつ まんぜ う
家康、30歳ごろ 箆に使った松を、万瀬に植える

はし つか ちい まつ いえやす りっぱ そだ
「箆に使った小さな松、家康のように立派に育ったよ」

いえやす げんざい はままつしてんりゅうく こうみょうじ てら た とし
家康が、現在の浜松市天竜区にある光明寺というお寺に立てこもっていた時、
たけだしんげん せ とし しんげん い や こうみょうじ かね わ
武田信玄が攻めてきました。その時に信玄が射た矢で、光明寺の鐘は割れてしま
ったそうです。

いえやす よこかわ げんざい はままつしてんりゅうくよこかわ とお す が り げんざい いわたしまんぜ
家康は横川（現在の浜松市天竜区横川）を通過して、百古里（現在の磐田市万瀬
あたり）まで逃げてきました。家康は、ここで食事をしようと、松の木を折って
はし か つか とし じぶん てんか お しげ い
箆の代わりに使いました。その時、「自分が天下になれば生い茂れ」と言って、
はし じめん いえやす まつ き え ど じ だ い いきお しげ
箆を地面にさしました。家康のさした松の木は、江戸時代、勢いよく茂ったと
つた いま ち げんざい まつ よ いえやす にし すす
伝えられ、今でもその地は、権現松と呼ばれています。家康はここから西へ進む
とき ばしよ かつし い かつし あざめい
時に、この場所を「勝越だ」と言ったことから、ここは勝越という字名になった
といわれています。

いえやす だいらくじ げんざい いわたしだいらくじ いちうんさい てら とお
家康は、ここから大楽地（現在の磐田市大楽地）にある一雲斎というお寺を通
つた みかたがはら い いちうんさい とし たけだぐん や つた
って三方ヶ原に行きました。一雲斎は、その時に武田軍に焼かれてしまったと伝
えられています。

*「勝越」はこの話では万瀬をさしていますが、社山あたりではないかという
せつ
説もあります。

●この本を読んで詳しくなろう

とよおかものがたり ぞうかんごう いわさき みちお へん いわさきみちお ねん
『豊岡物語 増刊号』（岩崎 道夫/編 岩崎道夫 1988年）

『ふるさとの土 敷地村』（敷地村 1951年）

16、酒井の太鼓

いえやす さい ま いくさ さかい たいこ はままつじょう まも
家康、30歳 負け戦でも酒井の太鼓で浜松城は守られた

ただつく たいこ てき さ
「忠次がたたく太鼓で 敵は去る」

げんき ねん がつ いえやす みかたがはら たたか たけだしんげん やぶ はままつじょう
元龜3（1572）年12月、家康は三方ヶ原の戦いで武田信玄に敗れ、浜松城へ
に かえ たけだがた へい お いえやす けらい
逃げ帰りました。そのあとを武田方の兵が追ってきました。そのとき、家康の家来
の酒井忠次が城の中で太鼓を打ち鳴らし、城の周りにいた敵を追い払ったという
ことです。

この時の「酒井の太鼓」といわれる太鼓は、明治時代になり、浜松町板屋町
げんざい はままつしなかくいたやちよう めいじ ねん みつけ
（現在の浜松市中区板屋町）のものとなりました。明治7（1874）年ごろ、見付
ちよう げんざい いわたしみつけ はなやきさぶろう にん はままつ まつ けんぶつ い
町（現在の磐田市見付）の花屋吉三郎ら4人が、浜松に祭り見物に行ったとき、
この太鼓が板屋町の屋台で使われているのをたまたま見つけました。そこで、彼
らは板屋町に何度も頼みこみ、やっとこれを売ってもらうことができました。そ
して、この「伝酒井の太鼓」は、その後、見付町に寄贈され、見付学校で児童の
とうげこう じかん あいず う な
登下校の時間などの合図として打ち鳴らされていました。

でんさかい たいこ げんざい いわたししていぶんかざい
「伝酒井の太鼓」は、現在、磐田市指定文化財となっています。

●この本を読んで詳しくなろう

いわた ねん
『磐田むかしばなし』（磐田市観光協会 1981年）

いわた ねん
『磐田ものがたり』（磐田史談会/編 磐田谷島屋書店 1988年）

いわた ねん
『磐田の文化財』（磐田市教育委員会文化財課 2009年）

「いわた文化財だより 第206号」※磐田市ホームページにあります

17、家康と草刈り舟

いえやす さい くさか ぶね おおたがわ わた さくせんせいこう てきだいさん
家康、32歳 草刈り舟で太田川を渡り、作戦成功で敵退散

くさ かく かわわた き きだっしゅつ
「草に隠れて川渡り、ボロでだまして危機脱出」

てんしょう ねん いえやす たけだ いくさ やぶ ほままつじょう めざ
天正2（1574）年、家康は武田との戦に破れ、ひとりで浜松城を目指して
に にかえ たけだ おって く おおた
逃げ帰っていました。きつと武田の追手はやって来るにちがいないのに、太田
がわ きし つ かわ わた こま
川の岸に着いたところで、川を渡れずに困ってしまいました。

そのとき、農家の女性が小舟に刈草を積んで川をやって来ました。「頼む、そ
なか い いえやす たの じよせい ふね きし つ かりくさ なか かく
の中に入れてくれ」と家康が頼むと、女性は舟を岸に着け、刈草の中に隠れさ
せてくれました。やがて、ふね げんざい いわたしひるいけ つ いえやす あんま
家の屋敷の裏の藪に隠れて汗を乾かしました。そして脱いだ鎧や着物を木の枝
け やしき うら やぶ かく あせ かわ ぬ よろい きもの き えだ
に干すとともに、たくさんの古い笠やボロを借りて木の枝に並べておいたので
す。すると、これを見た武田の追手たちは、いえやす けらい おおぜい おも
み、引きあげていってしまいました。

え ど じだい しょうぐん いえやす れい あんまけ
やがて江戸時代になり、将軍となった家康は、このときのお礼として安間家
た ひるいけむら じんじゃ きしん てら じんじゃ しなもの とち きふ
に立ち寄り、蛭池村の神社に寄進（寺や神社に品物や土地を寄付すること）を
したということです。

●この本を読んで詳しくなろう

いえやす ゆかい でんせつ わ みたらい きよし ちょ えんしゅうでんせつけんきゅうきょうかい ねん
『家康の愉快的な伝説101話』（御手洗 清／著 遠州伝説研究協会 1983年）

ぞく えんしゅうでんせつしゅう みたらい きよし ちょ えんしゅうしゅつぱんしゃ ねん
『続・遠州伝説集』（御手洗 清／著 遠州出版社 1974年）

18、中泉御殿と家康

いえやす さい なかいずみ おおいげ ごてん た
家康、45歳 中泉の大池のほとりに御殿を建てた

おおいげ み なかいずみ ごてん
「大池見ながらひとやすみ やっとくつろぐ中泉御殿」

てんしょう ねん なかいずみ ごてん おおいげ げんざい
天正15（1587）年ころにつくられたといわれる中泉御殿は、大池（現在の
いわたしななぶ いけ いえやす たかが
磐田市南部にある池）のほとりにありました。家康はそこでよく鷹狩りをしたと
いわれています。

いえやす なかいずみ げんざい いわたしなかいずみ ほってん かくち しょうにん
家康は中泉（現在の磐田市中泉）のまちを発展させようと、各地から商人を
あつ につけ げんざい いわたしみつけ いけだ げんざい いわたしいけだ
集めたり、それまで見付（現在の磐田市見付）から池田（現在の磐田市池田）に
む にし の とうかいどう なかいずみ とお みなみ お ま
向かって西に伸びていた東海道を、中泉を通るように南へ折り曲げたりしまし
た。

なかいずみごてん てんしょう ねん いえやす かんとうちほう うつ のこ
中泉御殿は、天正18（1590）年に、家康が関東地方へ移ってから残されま
した。いえやす な かんぶん ねん ほしい
家康が亡くなってからもしばらくありましたが、寛文10（1670）年に廃止
されました。

●この本を読んで詳しくなろう

ずせつ いわたしし いわたし ねん
『図説 磐田市史』（磐田市 1995年）

いわたしし つうしへん ちゅうかん いわたし ねん
『磐田市史 通史編 中巻』（磐田市 1991年）

いわたし いわたしかんこうきょうかい ねん
『磐田むかしばなし』（磐田市観光協会 1981年）

19、家康からもらった茶臼

いえやす さい い か こ しょうや かんどう ちやうす あた
家康、47歳 五十子の庄屋のもてなしに感動し、茶臼を与える

「もてなしの庄屋へ家康贈り物」

いえやす てんしょう ねん きよじょう はまつ げんざい しずおかけんはまつし
家康は、天正14(1586)年、居城を浜松(現在の静岡県浜松市)から

すんぶ げんざい しずおかけんしずおかし うつ げんざい いわたしなかいずみ
駿府(現在の静岡県静岡市)に移していました。また、現在の磐田市中泉にも

なかいずみごてん きず しゆくしゃ
中泉御殿を築いて宿舎としていました。

てんしょう ねん いえやす ごてん じゅうよう かいぎ ひら だいす たかが
天正17(1589)年、家康は御殿で重要な会議を開いたあと、大好きな鷹狩

りを楽しんでいました。鷹狩りも終わり五十子村(現在の磐田市五十子)に着

いたころ、庄屋の太郎兵衛の家でお茶をもらうことにしました。

せったい たろうべえ むすめ じょうひん み せいそがた いえやす
接待にでた太郎兵衛の娘キクの上品な身のこなしと清楚な姿に、家康は

じょうきげん むすめ しんばい たろうべえ いえやす えがお
上機嫌になり、もてなした娘を心配していた太郎兵衛たちは、家康の笑顔に

とても安心しました。

しんでんかいはつ わだい いえやす とち かいこん こんなん
やがて、新田開発の話題となると、家康は、土地を開墾することの困難さ、

すいがい おお い か ごむら のうみん どりよく しょうや くろう たいへん し
水害の多い五十子村での農民の努力、それをまとめる庄屋の苦労の大変さを知

り、とても感動しました。その後、太郎兵衛のところには家康から茶臼などが

おく しょうや なが かほう たいせつ
送られ、これを、庄屋は長らく家宝として大切にしたいとのことです。

●この本を読んで詳しくなろう

ねんちゆうぎょうじ むかし ふくでちやうきやういくいんかい ねん
『年中行事と昔ばなし』(福田町教育委員会 1986年)

ふくで つた ばなし ふくでちやうきやういくいんかい ねん
『福田に伝わるむかし話』(福田町教育委員会 2004年)

20、土井の姓

いえやす さい やしき りっぱ どい み さぶろうざえもん みょうじ あた
家康、51歳 屋敷の立派な土居を見て三郎左衛門に名字を与える

「土居に囲まれた土井さんは、家康認めた大地主」

むかし しもおおわら げんざい いわたしおおわら さぶろうざえもん ぶし
昔、下大原(現在の磐田市大原)に三郎左衛門という武士がいました。

さぶろうざえもん りやうち ひろ たにん とち ふ なかいずみ げんざい いわたしなかいずみ
三郎左衛門の領地は広く、「他人の土地を踏まずに、中泉(現在の磐田市中泉)

の代官所まで行ける」と言われるほどの大地主でした。

ぶろく ねん はまつ げんざい しずおかけんはまつし いえやす たかが
文禄2(1593)年、浜松(現在の静岡県浜松市)にいた家康は、鷹狩りのため

中泉御殿(現在の磐田市中泉にあった)に来ていました。そして、鷹狩りの途中

で三郎左衛門の家に立ち寄り、ひとやすみしてました。

すると、家康は、三郎左衛門の屋敷の城壁のような土居を見て、「これからは、

姓(名字)を土井としたらどうだ」と言いました。三郎左衛門は、これを受け入

れて、姓を「土井」と改めました。そして、名字帯刀を許された武士として徳川家

に仕えたと言われています。

*土居…中世、武士の屋敷地を囲む土塁(敵からの攻撃を防ぐために土を盛り

上げてつくったもの)、または屋敷地全体のこと。

●この本を読んで詳しくなろう

いえやす ゆかい でんせつ わ みたらい きよし ちょ えんしゅうでんせつけんきゆうきやうかい ねん
『家康の愉快的な伝説101話』(御手洗 清/著 遠州伝説研究協会 1983年)

ぞく えんしゅうでんせつしゅう みたらい きよし ちょ えんしゅうしゅつばんしゃ ねん
『続・遠州伝説集』(御手洗 清/著 遠州出版社 1974年)